

フェイクニュースとリアリティー

ヘンリー・ネヴィルの *The Isle of Pines* を読む

北村紗衣

本発表は、共和主義者で政治パンフレット著者であった Henry Neville による散文の物語『パインズの島』(*The Isle of Pines*, 1668) を、17 世紀末の読者の「島」幻想を反映したフェイクニュース的著作として読む試みである。この作品は、難破により南の島に流れ着いたオランダ人の船乗りが、かつてのこの島に流れ着いたイングランド人の末裔だという住民に出会う物語である。最初期のロビンソナードであり、ユートピア小説の先駆けでもある。あたかも実際の人物の回想録であるかのようなもっともらしさを有し、大当たりして各国語に翻訳されたことなどもあり、現代で言うところのバイラルマーケティングで広がったフェイクニュースのような側面を持つ作品であった。この発表においては、『パインズの島』をリアリティー的な作品として読解することにより、近世イングランドの物語がもともと有していた、ある種のフェイクニュース的な性質を指摘することとしたい。第一節では『パインズの島』及びその著者であるヘンリー・ネヴィルについて、本作がこれまでどのように読解されてきたかを、政治的背景を勘案しつつまとめる。第二節ではそれをふまえて、『パインズの島』がリアリティーを醸し出すためにどのような仕掛けを用いているかを分析することとする。

1. 『パインズの島』の来歴とヘンリー・ネヴィル

『パインズの島』には、矢継ぎ早に刊行された複数の版があり、ややテキストの来歴が複雑である。最初の版(以降「第1テキスト」と呼称)である *The Isle of Pines, or, A Late Discovery of a Fourth Island in Terra Australis, Incognita* (Wing N505)は、イングランド人の帳簿係で遭難して無人島に流れ着いたジョージ・パインの手記だと称している短いパンフレットである。第2テキストである *A New and Further Discovery of the Islle of Pines in a Letter from Cornelius van Sloetton* (Wing N509)は、オランダの船員でやはりパインズの島に漂着し、パインの子孫たちと出会うことになったコルネリアス・ファン・スローテンの手紙ということになっている。第3テキストである *The Isle of Pines, or, A Late Discovery of a Fourth Island near Terra Australis Incognita by Henry Cornelius van Sloetten* (Wing N506)は、既に刊行されていたパインの手記の他、ファン・スローテンの手紙に挿絵やアブラハム・ケークなるアムステルダムに住む人物の手紙が付け加えられたものである。

『パインズの島』の中心となる物語部分は、エリザベス一世の治世に、主人である商人とその家族とともに東インド諸島へと出航した帳簿係ジョージ・パインの記録である。マダガスカルに近づいたあたりで嵐に見舞われて遭難し、パインの他に黒人奴隷の女性1名を含む4人の女性だけが生き残り、無人島に漂着する。ここがタイトルとなっているパインズの島(*The Isle of Pines*)であり、島の豊かな自然の恵みのおかげで一行は生き延びることができた。やがてパインは4人の女性たち全員と子供を作ることとなり、島は人口が増えて繁栄するようになる。パインは島の支配者の職務を長男のヘンリーに譲り、ヘンリーはその責務を息子ウィリアムに譲るというふうに、男系による支配権の相続が行われる。ファン・スローテンが出会ったのがこのウィリアムであり、一行はパインの子孫である島民たちから歓待を受ける。

この作品は植民地支配や人種差別などさまざまな視点から分析することができる作品であるが、著者であるヘンリー・ネヴィルが共和主義者であることに重点を置き、政治諷刺ものとして読まれることが多い。既にさまざまな論者が指摘しているように、『パインズの島』は一見したところ家父長制的ファンタジーを紡いでいるようでありながら、実際はそれを諷刺しているという読解には比較的妥当性があるように思われる。島の父であり王であるジョージ・パインは、当時男性らしいと考えられていたような種類の徳に満ちた人物としては描かれておらず、孤島の主として権威を得るまでの過程も偶然の産物である。さらにジョージの死後、島は荒廃し、大きな騒乱が発生する。ジョージの作ったユートピア的な家族だけの世界と、それが拡大して国ができた結果、平和な状態を継続することが困難になった子孫たちの世界が対比されている。このため、本作は王政を皮肉る共和主義的な立場から書かれた諷刺的な物語としてとらえるべきであると考えられる。

2. 「本当の話」

しかしながら、このような言ってみれば「真面目な」政治的読解において脱落しがちなのが、本作のセンセーショナルリズムや、リアリティーを生み出すための仕掛けである。この作品は事実を装った物語である。『パインズの島』の第1テキストの表紙には、「あるイングランド人たちの本当の話 (A True Relation of certain English

persons)」と書かれており、これは第3テキストでも継承されている。第2テキストの表紙には「本当の (true)」という言葉はないが、ファン・スローテンの「東インド諸島への旅の話 (a Relation of his voyage to the East Indies)」だという記述がある。いずれも誰かが語った実話であるという触れ込みである。既にフランセス・E・ドランが指摘しているように、17世紀の刊行物において「本当の話 (True Relation)」という謳い文句は非常に人気があり、また「話 (Relation)」という語も実録もののタイトルによく現れる言葉であった (Dolan, p. 2)。

『パインズの島』はこのようにいかにも実録風な様相を身にまとった刊行物として出版された。内容の点でもさまざまな文学的工夫を用いており、他の作品や実在の人物などを取り込みつつ、架空の物語にリアリティを与えようと努力している。このような工夫のため、『パインズの島』は非常にもっともらしく、実際にありそうな物語になっている。ギャビー・マールバーグが指摘しているように、この作品の第1テキストはたちまち各国語に翻訳され、フランスやドイツなどを中心に「本当の話」であると誤解されることがあった (Marlberg, p. 114)。一方、イングランドでは比較的早くからこの物語が「本当の話」ではないことを見抜く者がいたが、これはネヴィルができるかぎり内容の真実味を増そうと努力する一方で、ところどころに意図的に内容をぼかすような記述もしていたためであると考えられている。

このような、実際に起こったことを書いているようでそうではないという内容のテキストがある時は額面通りに信じられ、ある時は冗談として受け取られるという形の受容は、現代においてもしばしば起こっていることである。アメリカ合衆国の諷刺メディアで面白おかしい虚構記事を専門とする『ジ・オニオン』(The Onion)が配信しているニュースは、事情を理解していれば冗談だとわかるが、元来のコンテキストから離れて受容されると事実の報道だと勘違いされることがあり、とくに非英語圏の読者にとっては事実か虚構かの判別が困難になることがある。『ジ・オニオン』は読者を欺くつもりでフェイクニュースを流しているわけではないのだが、受け手がそれを真実と考えてしまう。『パインズの島』が経験したような受容は、実際のところ極めて現代的であると言える。『パインズの島』はコンテキストがわかる者にだけは冗談として理解されるようなフェイクニュースらしさを有する作品である。

さらにここで指摘しておきたいのは、『パインズの島』のように、孤立した島などに複数の人間を置いてそれを観察するというコンテンツは、現代においてはリアリティショーの確立したフォーマットとなっていることだ。『サバイバー』(Survivor)や『ラブ・アイランド』(Love Island)などの番組は、外界から離れた場所に参加者を隔離し、そこで起こる人間関係を観察するというものである。こうしたリアリティショーは現代の視聴者の興味をかき立ててやまない。この種のリアリティショーは、編集などによる相当な作り手の誘導が存在するにもかかわらず、あたかも一切筋書きがない現実を撮っているかのような臨場感が売りもののひとつであり、作りものだとわかってもリアリティを感じる視聴者がいる。『パインズの島』と現代のリアリティショーは、明白に異なるところも多くある一方、孤島に人間を置き、その結果どうなるかを観察してみたいという受け手の欲望を考慮して作られた作品という点においては共通点を指摘できる。『パインズの島』を「本当の話」だと思い込んだ読者たちと、『サバイバー』を見ている現代の視聴者は、観察の対象である島をリアルなものだと信じたいという欲望を共有している。

そして、このできるかぎりリアルに作り上げた『パインズの島』が実際は完全な虚構であるということ、作品の諷刺の対象である王権の起源と並べて考えると、不穏なパラレルが浮かび上がってくる。『パインズの島』はありもしない島に関する想像をまるで真実であるかのように装って刊行した作品である。そして『パインズの島』に描かれているパインの一族の物語は、ジョージ・パインというあまり王にはふさわしくない男のところにひょんなことから王権が転がりこみ、そのまま崩壊のように世襲の王朝が成立してしまうというものだ。言ってみれば『パインズの島』は、いくら一見真正に見えようとも王権の起源は捏造であるということを描いた物語であり、さらにそれを描いた物語も一見非常に真実らしく見えるが全て虚構である。『パインズの島』は孤島への漂着という装置を用いて、内容においても形式においても一見真実らしく見えるものが虚構であることを描き出した作品であると言ってよいであろう。『パインズの島』は、王権というフェイクニュースに関するフェイクニュース的著作なのだ。

参考文献

- Dolan, Frances E. *True Relations Reading, Literature, and Evidence in Seventeenth-Century England*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2013.
- Mahlberg, Gaby. *Henry Neville and English Republican Culture in the Seventeenth Century: Dreaming of Another Game*. Manchester: Manchester University Press, 2009.